

編集後記

今年度は、特に注目すべき特徴のある耐震実験はなかったが、「水平 2 方向地震力を受ける鋼製橋脚のハイブリッド実験」の科研費の最終年でもあり、前年に引き続き、多量の鋼製橋脚のハイブリッド実験が行われた。研究成果も注目すべきものが得られ、現行設計示方書の問題点を明らかにできた。この実験では、3 方向から同時に載荷できる比較的大型の載荷装置(1000kN 押し引き)が必要であり、全国の大学では本学しかできない。そのため、研究レベルも世界最先端に行くことができた。この研究は前年までのポスドクの党紀君、およびドクターコースの袁輝輝君、修士課程学生の諸君によって進められたものである。研究成果を国内の学術誌に投稿したところ、1 名の査読委員のみ異常に厳しい査読意見があり、受理されなかったため、耐震工学に関する著名な国際誌に投稿し、査読意見に対する修正後に無事受理され却ってよかった。本学のような地方私学での研究に対する偏見がないことを期待している。

他の注目すべき研究は、1000kN MTS 動的アクチュエータを利用した、極軟鋼ダンパーの実地震波を入力した半リアルタイム実験で、一定振幅 SIN 波を動的に入力した場合との比較を行っており、これも全国では本学しかできない特徴のある実験であった。これは Dr.3 年を修了したが、半年遅れた、張超鋒君が学位論文としてまとめたものである。この他、矩形断面鋼製橋脚の地震後の補修に関する実験が修士論文として行われ、よい成果が得られた。このように今年も多くの学生、院生の働きにより、耐震実験センターならではの学術面での研究成果が上げられたことを嬉しく思っている。